

禪の友

—Zen no Tomo—

10
October 2022





ご本山だより

大本山永平寺

【達磨さまの坐禅】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



達磨さまのご命日にあたる十月五日には、永平寺でも菩提達磨大和尚さまに心よりご供養の法要を勤めます。

達磨さまといえば、七転び八起き、起き上がり小法師の縁起物として、また、幼いころに興じる「だるまさんがころんだ」などで有名ですが、この達磨さまが、実はインドから中国へ「坐禅」をお伝えになった僧侶であったことは案外ご存知ない方も多いのではないのでしょうか。

「坐禅」は、足を組み、手を組み、右にも左にも偏らず、前にぐまらず後ろにも仰がない、正身端坐、身体を真つすぐに調え、呼吸を調えた姿です。

また姿勢だけではありません。普段私たちは、相手と対立したり競争したり、相手と比べては善いとか悪いとか、大きい・小さい、綺麗・汚い、損だ得だと心の落ち着きどころが定まりません。「坐禅」では右も左も前後も真つすぐに対立のない姿勢ですから、その心も対立することなく真つすぐに定まります。この「坐禅」の対立

のない姿と真つすぐな心こそ、お釈迦さまのお悟りでした。

お釈迦さまから数えて二十八代目となる達磨さまは、インドからはるばる中国へ渡り、このお釈迦さまのお悟りを具現した「坐禅」を伝えられました。その「坐禅」は達磨さまから中国のお弟子さまに伝わり、代々受け継がれ、天童寺の如浄禅師さまに伝わったのです。

そして、時は鎌倉時代、日本から求道心をもって宋の国へ旅立たれた道元禅師さまは、如浄禅師さまに相見され、正伝の仏法としての「坐禅」を嗣続されたのです。

お釈迦さまのお悟り、「坐禅」は、達磨さま、如浄禅師さま、道元禅師さまと、師匠から弟子へ、そのまた弟子へと正しく伝えられ、現在では日本国内のみならず世界中で親しまれております。

今日も永平寺ではこの達磨さまにより伝えられた「坐禅」にて行住坐臥を調え、日々の修行を勤めております。



ご本山だより

大本山總持寺【十月の總持寺】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二二

十月は三十一日あるところから
大月たいげつという異名があります。

また、それより少ない日数月を小月しょうげつといっています。

總持寺では十月より冬安居制中ふゆあんごさいちゅうに入り、首座和尚しゆせおしょうを中心に年明けの正月半ばまでの一〇〇日間の修行期間が始まります。

その中、四月九日に挙行される予定でありました新貫首しんかんしゆ・石附周行いしづちしゅうこう禪師さまの晋山開堂式禮しんさんかいどうしきらいが感染症拡大の為やむなく延期となりましたが、十月十一日（火）に挙行されることになっております。

本山独住第二十六世となられる新貫首石附禪師さまの晋山開堂式禮は新たに住職がお寺へ入られると同時に、お寺を広く開放し、皆さま方の信仰、修養の道場とする旨を宣言し、実

際に、本堂（大祖堂だいそどう）中央にある須弥壇しゆみだんに登り、まず祈りを捧げる言葉や、報恩の言葉を、香を焚きながらお唱えし（これを香語かうごといいますが）、その式に参加している大勢の僧侶（修行僧）たちと大問答を展開して、開山以来の厳しい修行の型を示すもので、厳粛で荘嚴な式であります。

また、まだ感染症が心配される中ではありますが、感染症対策を取りながら万全で望まなければなりません。

また十二日から十五日に亘っては御開山鑿山禪師・二祖峨山がざん禪師（お二方を御兩尊ごりょうそんと申します）をお慕いし、その慈恩に報いる為の「御兩尊御征忌しよき」が営まれ、全国から選ばれた焼香師さまが禪師さまの御代理として法要の導師をお勤めになられ、報恩の誠が捧げられます。

選・坊城俊樹

ひたすらにただひたすらに蟻の列

埼玉県 小林茂之

評

これは「蟻」という季題の本意の句。簡単な構成の句だが蟻という生物はこれが宿命なのである。この句はそれだけを言っている。「蟻の列」を「人の列」としたらどうか。蟻と人は似ている。人もまたひたすら列をなして生きてゆかねばならないのだ。

梅雨晴れといふ星空のありにけり

宮城県 阿部徳夫

評

梅雨のころにも晴間というものがある。当然日中のもの。しかし作者は夜にも雲が切れて梅雨の晴間があることに気がついた。良く見ると暗くてもそこは青空だったりする。昼間には見えない星たちが耀いているのもこの作者の発見である。

◆ 緑蔭や九九のかけ算聞こえ来る

兵庫県 内藤昭子

◆ 開店へ手早く締めし単帯

岐阜県 大下雅子

◆ 中天に絵筆をふるひ星ながる

神奈川県 堀田耕一

◆ 施餓鬼会の若き僧侶の刺のあと

熊本県 福島隆子

◆ 襖はづすしばしもたるる太柱

山口県 御江恭子

◆ 虫喰ひの跡のなぞめく落し文

北海道 大野節子

◆ 父の日の何事もなく過ぎにけり

静岡県 石濱 徹

◆ 笑声の洩れくる鮑海女の小屋

奈良県 竹村和成

◆ エアコンを止めて昭和の夏にをり

群馬県 大淵 洋

◆ 尺蠖の身を反らしたる昼の月

大阪府 柏原才子

選者吟

夏蝶の饒舌に来て墓黙す

俊樹

作句小見

夏の蝶とは饒舌なくらいに派手な原色である。それは揚羽蝶であったり大型のものが多く。その羽撃きの猛々しさもまた饒舌である。ここにある墓は実は外国人墓地のそれであった。寝墓はその蝶が舞う下でひたすら寡黙に横たわっていた。

選・長澤 ちづ

大いなる目に見えぬ人草原を渡りしごとく
風なびきたり

ロンドン バロー典子

評 「目に見えぬ人」とは初句の言葉から人を越えた神のような存在を指しているのだろう。風が吹き草木がそよいだ様子を、このように詩的なフレーズによって表現した。現在の欧州の情勢を思えば戦争終結への祈りすら籠もるようだ。

小声にてあいさつ交はす児らの列マスク
はずして今朝の登校

三重県 藤川 幸子

評 コロナ禍も少し落ち着いた時期のことか、あるいは夏休み前の熱中症対策のころか。子どもたちにとって大事な日々が疫病のため様々犠牲になっっている。一日も早い終息をと思う。

◆ 藍色の濃きあぢさみの花毬はがれきを溜めし土手に連なる
岩手県 阿部 照子

◆ さんざめく三朝の宿を抜け出でて河原に一人河鹿聞きおき
鳥取県 徳本 義則

◆ 駅裏の森のアカシア蔭いろに咲き満てり町の泉のごとし
北海道 菅原 三江水

◆ 捨ててとの夫の言葉空耳にバジヤマのほころび繕っている
秋田県 小松 紀子

◆ 桜ん坊摘まんと上り下りられず助けを求めし老木伐らる
三重県 西村 廣視

◆ 長すぎる肢もてあましカマドウマ規格を越えしものさみしき
静岡県 小川 健治

◆ 初めての眼鏡をかけてバスケットの練習する児顔の涼々しく
山口県 濱田 道子

◆ 百八体明かり灯して初盆の白寿で逝きし母を迎へる
静岡県 柴田 雅史

◆ 二十年使う自転車錆だらけ、だけどもまだ乗る尻が放さぬ
福岡県 三吉 誠

◆ 夫逝きて半年が過ぎ時折の夢にやさしさ見せる夫おき
福島県 小原 富子

選者詠

岩木川葭原水辺の鴨親子カメラが追えば水尾のはなやぐ
ちづ

作歌小見 菅原さんのアカシアの花の色の表現が素敵でした。普通

でしたら「白い花」で済ますところを「蔭いろ」と命を思わせながら、結句の「町の泉」へつなげています。柴田さんの亡き母への思いもH音の頭韻に透明感があり祈りが籠もります。